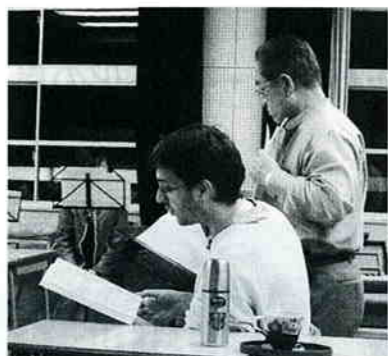


# フランスからのインターン生が帰国

昨年9月より、フランスのポワチエ大学経営大学院からインターンとして県立大に来ていたJ.-B.トランシュバン氏が、6か月の任期を終え、3月上旬に帰国しました。



同氏は県立大に滞在した6か月の間、主として山口EU協会関連の仕事に従事しました。英仏語版ホームページの作成に取り掛かり、またEU協会個人会員の社会人に対してフランス語による異文化交流会(毎週金曜日)を、そして学内の有志学生に対してフランス語のレッスン(水曜日)を行いました。そのほか、女性コーラスの市民グループにフランス語の発声練習を行ったりもしました(写真)。さらに地元企業の国際業務支援の一環としてヤナギヤ(宇部市)に派遣され、フランスからの商談ミッションに参加する活動をしたり、防府のマツダ工場視察なども行いました。

同氏は県立大内の国際情報資料センターに常駐しましたので、そこに集う学生たちとの交流が常にあり、学生たちにとっては、大学にいながらにして異文化交流を実践できたこととなります。

またオフの時間には、県の国際交流協会の活動に活発に参加したり、在留外国人との親交を深めたり、山口の史跡や豊かな自然を満喫したようです。

県立大学および山口EU協会では、平成15年度も同様に仏ポワチエ大学経営大学院からインターンを招聘する予定で、すでに連絡を開始しています。決まり次第、またこの場を通じて皆さまにお伝えしたいと思います。

## 県立大学国際情報資料センターの活動

山口EU協会では、本号で取り上げたEUフォーラム以外にも、主として県立大内の国際情報資料センターをベースにいろいろな活動を展開しています。例えば1月下旬には旧ユーゴのコソボにおいて二年間にわたり医療支援活動を終え帰国した濱田裕子さん(岡山のアジア医師連絡協議会(AMDA)所属)を招いてのセミナー、2月下旬には県立大の小川秀樹助教授による国際交流協会下関支部におけるEUセミナー、3月下旬には空爆前のイラクから帰国したばかりの県立大学生中田聖大(きよひろ)さんの帰国報告会などです。とりわけ中田さんの帰国報告会については、世界の注目を集めるテーマだったこともあり、地元メディアでもかなり報じられましたが、ご関心のある方は山口県立大学国際文化学部国際関係論(小川)研究室のHPをご覧ください。

(アドレス: <http://www.ann.hi-ho.ne.jp/h-ogawa/>)

# おしらせ

## 秋のEUミッションについて

創刊号でもお知らせしましたが、山口EU協会では本年10月中旬に8日間程度の日程でEU機関を視察するミッションを計画しています。昨年創設された福岡EU協会との合同ミッションとなる予定で、EU委員会・閣僚理事会などがあるベルギーのブリュッセル、欧州議会があるフランスのストラスブール、中央銀行があるドイツのフランクフルトなどを訪問する予定です。これについての詳細は後日あらためてお知らせします。

## 徳山サテライトカレッジのご案内

山口県立大学では、山口大学、徳山大学および徳山高等専門学校などととも、平成13年度より、徳山駅ビル再開発事業の一環として、徳山市主催の「徳山サテライトカレッジ」に参画し、地域の方々の生涯教育の一翼を担っております。

県立大が担当する本年度前期の講義は「多文化共生社会を目指して」と題して、世界各国を順番に取り上げる予定にしています。日程、テーマは以下の通りです。

- 5月13日(火) 第一回「スリランカ」(にしやんた)
- 5月27日(火) 第二回「中国」(折戸洪太)
- 6月10日(火) 第三回「スウェーデン」(二村克行)
- 6月24日(火) 第四回「ベルギー」(小川秀樹)
- 7月8日(火) 第五回「フィンランド」(井生文隆)
- 8月12日(火) 第六回「ロシア」(相原次男)
- 8月26日(火) 第七回「韓国」(李修京)
- 9月9日(火) 第八回「アフリカ」(安溪遊地)
- 9月30日(火) 第九回「日本」(木越俊介)
- 10月14日(火) 第十回「ポーランド」(渡邊克義)

各回(90分)とも火曜日の午後7時から徳山駅ビルの3階において開催されます。EU加盟国ないし加盟予定国も含まれています。お近くで世界にことに関心をお持ちの方は是非ごぞってご参加ください。

## 山口EU協会暫定ホームページを公開

県立大でインターンとして活動したJ.-B.トランシュバン氏が作成した山口EU協会のホームページを暫定で公開しています。アドレスは下記のとおりです。

<http://www.ann.hi-ho.ne.jp/h-ogawa/europe/accueil.html>

## 会報の愛称が決まりました

会報の愛称を、NHK山口放送局の三角崇人さんがお寄せいただいた「おいでませEUROPA」に決定いたしました。みなさまのご応募、ありがとうございました。

# 山口EU協会会報 2003.4

# おいでませ!! EUROPA No.2

YAMAGUCHI EU Association 山口EU協会事務局 山口市桜島3-2-1 山口県立大学内

もくじ	CONTENTS
2003年1月 山口EU協会発行	
1	県立大学でEUフォーラム開催
2	EUフォーラムレポート
3	ポーランド語雑感
4	フランス人インターン生が帰国

## 県立大学でEUフォーラム開催

山口EU協会主催の昨年度最大のイベントとして、2003年1月21日に山口県立大学新キャンパスの看護棟階段教室において山口EUフォーラムを開催しました。東京から長坂寿久氏(拓殖大学教授)を基調講演に招き、根元正一氏(日本経済新聞山口支局長)、斎藤宗房氏(山口トヨタ株式会社社長)、金子和夫氏(日本総研上級主席研究員)の論客によるパネルディスカッションも加え、150人近くが参加するイベントとなりました。小川助教担当の国際関係論Ⅱの受講生の参加もあり、盛況となりました。

岩田学長のあいさつ、EU代表部からのあいさつのR.クーパ一国際交流員による朗読などに続いて、基調講演とパネルディスカッションが行われました。

講師の長坂氏は海外経験が豊富で、特にオランダ事情に詳しく、ワークシェアリング等、現在熱い話題となっている問題にも踏み込める論客であり、かつNPO/NGO問題にも造詣が深く、フォーラム後に国際関係論Ⅱの受講生に対して実施したアンケートでは、たいへん有意義な講演であったと多くの学生が記していました。

ただ外部から計4名の論客を呼んだ割には時間が非常に短かく、全般的にやや消化不良に終わった面は否定できず、今後のとり組みへの反省点となりました。実施にあたっては地域共同研究センターのご支援をいただきました。

フォーラム終了後には、旧キャンパスC号館4階の国際文化学部多文化資料室のスペースを借りて新しくオープンした国際情報資料センターのお披露目かねてレセプションを開催しました。20数名の参加があり、EUの各地からのワインとスナックを楽しみながら、歓談が行われました。その間、フランスのポー大学大学院からのインターンとして県立大学に滞在中のJ.-B.トランシュバン氏により、トランシュバン氏が作成を担当してきた山口EU協会の欧文版ホームページの内容が実演紹介されました。レセプションは本学名誉教授の酒井ツギ子先生の司会のもと、関係者らのなごやかな交流の場となりました。

基調講演の長坂寿久氏(拓殖大教授)はオランダの例を引き合いに出して、市民社会を重視するヨーロッパ流社会改革の事例を紹介しました。その内容は、参加者の一人による報告に述べられていますから、ここでは割愛させていただきます。ただ長坂氏が、その本題に入る前に話をされたシドニー・オリンピックの事例をこの場を借りて紹介しておきましょう。オリンピック予定地が北京を下してシドニーに決まったとき、もっとも決定的だったのは、行政と産業界(企業)と民間というかNPOの3つのセクターが対等のパートナーシップを組んで計画の立案の段階から加わり、環境に配慮したオリンピックという姿を作り上げようとしたことでした。例えば、会場までは公共交通の利用を原則として、そのチケットを入场券に含めて販売してしまうなどのたくさんのおもしろいアイデアが実行に移されました。その取り組みの中でとくに、グリーンピース・オーストラリアの地に足のついた働きは特筆すべきものでした。パブリックということ、つい日本人は政府や自治体の守備範囲のように考えてしまいがちですが、それは「みんながかかわる」ということなのだ、という原点に戻ることが大切だと指摘されました。

さてパネリストにお呼びした3名のうち、国際化の中で地域をいかにして活性化・再生するかということを中心に話された金子和夫氏(日本総研)の話をご紹介しましょう。

「私、東京から毎週1回は山口に通ってもう10年になります。山口県というところは、山口の方はあまり気づいておられませんが、すばらしいところです。新しい視点でご自分のライフスタイルを考え直す。そのヒントとなるものがEUにはたくさんあると考えています。」

(2面につづく)



山口県の特徴として、①小さな町がたくさんあること、②美しい自然と田園風景、③県民の豊かなライフスタイルがあります。例えば多くの県庁マンが週末田んぼづくりをしているような県が他にありますか。朝は瀬戸内海で釣りをし、午後は日本海で釣りというようなことが当たり前できて、しかも例えばヨットを持とうと思ってもそんなに高くもない。阿東町あたりに広がっている田園風景は、それはみごとなものですね。

このような特徴を地域の再生の力にすべきなのですが、一方では大きな都市を作りたいといい、企業を誘致して若い人が働ける場をつくらう、といいます。たしかに、徳山あたりは昭和30年代から40年代にかけては、日本の産業の優等生として先頭を走ってきました。しかし、今では重厚長大産業は、環境問題ひとつを考えてもかつての優等生ではありません。新しい価値観でものごとをとらえ直さなければなりません。山口県には、日本一と誇れるものがたくさんあります。例えば東和町です。高齢になってもみなさん元気で生き生きしておられる。ここでは70代をおとなといい、60代は青年です。また、山口市の商店街は元気がないと思っておられるかもしれませんが、そんなことはありません。地方都市では例外的に商店街が元気な町といえるんですよ。それと、女性起業家の数と元気が日本一です。福岡県の人が、わざわざ山口県の起業家塾を受けに来るぐらいなんです。これは、行政と住民がうまく知恵を出し合って作り上げた大きな成果です。町の専門家を束ねるような「さぼらんで」とか、いろいろなユニークな取り組みがあるところも魅力です。

小さな都市にも魅力と活気があるのが、ヨーロッパです。例えばボンなんて20万弱の都市ですよ。町の中心がはっきりしていて、そこに広場があり、教会と市役所があります。そこでは毎日結婚式がとり行われていて、市長が仲人として、この町で結婚式をあげてくれたカップルを祝福します。道には市場が広がり、カフェやレストランもあります。夕方になり、道に露店の市を出していた人達がまわりの農村地帯に帰っていくと、広場は深夜まで飲んだり食べたりして楽しむ人々で一杯になります。とにかく、一日中人出が絶えないんですね。郊外には商業が立地しないので、そこには広大な農村地帯の美しい田園風景が広がっています。



長坂寿久氏の著書『オランダモデル』(日本経済新聞社)

島根県庁につとめている松井さんという女性が、イギリスでの経験として話しておられましたが、イギリスの田舎には過疎がありません。例えば、町で稼いで、50歳過ぎたら田舎に引っ越すん

です。小さい2階建ての家を買って田舎暮らしを楽しみ、2階をペンションにして週3日ぐらいいそこにお客様を迎え入れる、そういったライフスタイルが確立しています。

こうしたEUでの例と引き比べてみると、山口市ではダラダラと郊外まで家が建ち、バスも大赤字を出しています。路面電車などの活用という道もあり得るのに、山口の人たちは車に頼りすぎですね。大切なのは、『知恵をあわせてみんなでこんなまちを作ろうや』という町づくりのグランドデザインをもつことではないか、と考えています」

(国際文化学部教授 安溪 遊地)

## オランダの社会変革に学んだこと

**長** 坂寿久氏の講演を聞いて、今後の日本のあり方を真剣に考えなければならぬのだと思った。20世紀は「民主主義の赤字」が露呈した時代となった。つまり民主主義であればそれでいいというものではないということだ。政府・企業・NGO/NPOの三者が対等なパートナーシップで共に歩いているという欧米の社会構造は、一点に力が集中することなく、ともに意見を出し合い、社会を創造するという意味で、最も民主的で、かつ有効な制度だと思う。シドニーオリンピックが、当初から環境NGOの参加を求める方法により成功を収め、今後のオリンピックのあり方に一石を投じたように、三者が社会運営に対等に参加するという社会構造を、日本をはじめ多くの国が見習うべきだと思う。

とりわけオランダでのパートタイム労働のあり方は、とても素晴らしい制度だと考える。労働時間差による差別を廃止し均等な待遇を与え、育児休業などをしっかりと保障し、多くの仕事をパートタイムで運営する。このことで企業の生産性や柔軟性がアップし、労働組合員組織率も42%に増加、さらに世帯所得や消費率の上昇により、経済パフォーマンスが向上したという。

このパートタイム労働により経済が活性化したというのも素晴らしいが、私はこのことで人々の「生活革命」が達成されたということが最も意義深いことだと思った。自分の意志で自分だけのライフスタイルを選べ、それにより自己実現を達成し、さらに家族を再建することができたというのだ。今の日本は、フリーターで溢れ、自分の夢を実現できるだけの社会構造もなく、家族も崩壊の危機を迎えている。今、「生きる」ことへの見直しを成し遂げるために、仕事・職のあり方を見直すべきなのだと思感した。NGO/NPOがそのセクターを拡大し、法律や教育を見直し、市民が動かす社会を築くことが、今の日本に求められており、そのとてもいい見本がヨーロッパにあるのだと学ぶことができた。

(国際文化学部2年 久木田 那奈)

## ポーランド

# ポーランド語雑感 —英語化の嵐の中で—

山口県立大学助教授 渡邊 克義

## Report

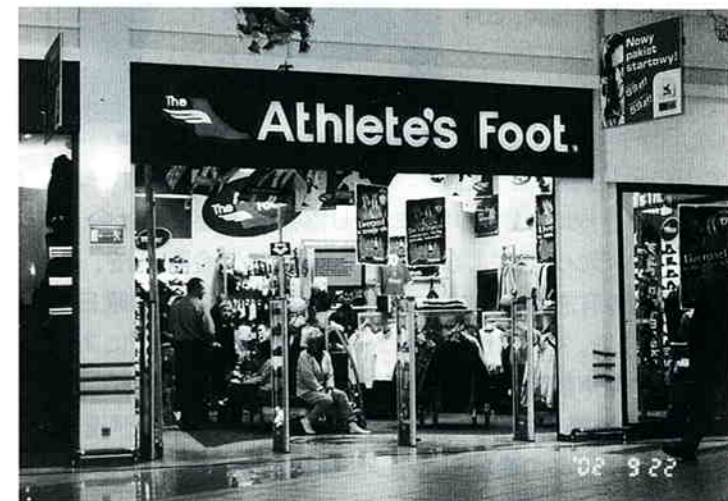
**ポ**ーランドの昨今の最大の関心事はEU加盟である。昨年12月12、13日にコペンハーゲンで開かれたEU首脳会議で新規10カ国の加盟交渉が終了した。ポーランドは2004年5月1日から、キプロス、マルタ、チェコ、スロヴァキア、エストニア、ラトヴィア、リトアニア、ハンガリー、スロヴェニアとともにEUの正式メンバーとなる。EUはかくして現15カ国から25カ国体制となる。加盟交渉においてポーランドはかなり自国に有利な条件を獲得している。補填金は当初4億4300万ユーロとされていたが、2007年以降の構造基金の一部を前倒しし、総額10億ユーロが追加された。国境警備費として2億7100ユーロを獲得。さらに直接農業補助金としてEU水準の40パーセントを大幅に上回る分が支給されることになっている。国民の一部にはいまだEU加盟に対する懸念があるが、政府はマスメディアを通じて加盟に伴うプラス面を強調している。

現在のポーランドではすべての尺度を西側に合わせようとしていることが見て取れる。数年前には教育制度も西側に合わせ、6・3・3制に変えた。かつてロシア語は必修外国語であったが、いまは英語をはじめとする西側の言語が人気だ。日本同様、語学学校が雨後の筍のように現れ、繁盛している。ポーランド語は英独仏語などと同じラテン字母を用いているため、コンピュータ用語など英語が堰を切ったようになだれ込み、「言葉の乱れ」とどまるどころを知らない。その速度は日本語に英語が入ってくるペースを確実に上回っている。

必要もないのに英語で表記することは日本、ポーランドで共通して見られる現象である。

どうしても英語で表記したいのならば、正しい英語で表記してもらいたいと願うのは私だけであろうか。私が愛用しているポータブルビデオのケースには、It's a assistant of enjoy your life. と記されている。英語の専門家でない私にもこれが正しい英語でないことくらいすぐにわかる。ワルシャワでもおもしろいものを発見した。ハイパーマーケットの中のあるスポーツ洋品店の名前が Athlete's Foot であったのだ。直訳すれば「アスリートの足」でなかなか粋な店名ではある。しかし、athlete's foot とは「水虫」という意味である。この店の前を通る時、いつも思っていたのは、「店長は店名の意味を知っているのだろうか」ということであった。

ポーランド語と英語は兄弟ではないものの従兄弟姉妹ほどには近い関係にある。従って、互いに似ている語彙がたくさんある。形が似ていても違うことを意味する語彙というものも必ずあるもので、これらはふつう「偽の友だち」と呼ばれている。たとえば、ポーランド語の legitymacja と英語の legitimation は語源も同じなのだが、前者は「証明書」、後者は「合法化」



の意味で用いられる。最近ではこれにおもしろい傾向が見られる。ポーランド語の fiksowa7 はフランス語 fixer に由来する語で、「狂乱する」という意味である。しかし、この語が英語の fix の意味を持ち、「(スケジュールなどを)確定する」の意味でも用いられ始めているのである。実はこれらは氷山の一角に過ぎない。類例は数多い。となると、日本語でも「ナイーブ」が「幼稚な」、「スマート」が「頭が良い」の意味で使う日が来るのであろうか。あるいは、そういった現実がもう始まっているのかもしれない。そうはいつても、話者人口が少なくない日本語やポーランド語の将来を危ぶむ必要はあるまい。それは杞憂というものだ。

## 山口国際映画祭のおしらせ

2003年5月16日～18日 県立大学講堂

山口国際映画祭実行委員会(山口県立大学内に事務局)が主催し、山口EU協会も共催する山口国際映画祭が来る5月16日(金)～18日(日)に開催されます。3日間にわたって県立大講堂で35mmフィルムの映画を3本上映し、世界各地の映画を鑑賞します。しかも鑑賞の前後には、映画で取り上げられた社会に関連した講演会などのイベントも行われます。現在予定されているのは以下の三つのユニークな作品の上映です。

- ・モンスーン・ウェディング(インド映画)
- ・ガッジョ・ディーロ(フランス・ルーマニア映画)
- ・カドッシュ(イスラエル映画)

なお映画に併せて、インドのシタールの演奏、シヴァ・インド料理の賞味会、フランメンコの披露、ロマ問題の講演会、イスラエルの宗教・社会問題に関するパネルディスカッションなどが予定されています。

お問い合わせ 電話 083-928-5778 ロバート・クーバー